

アカ語の音韻構造および形態構造の概略¹⁾

桂 満 希 郎

An outline of the phonological and morphological structure of the Akha language in northern Thailand

by

Makio KATSURA

ま え が き

この論文は、筆者が1964年10月より1965年にわたる約6カ月間、および1968年4月から5月に至る約2週間の二つの時期に、タイ国チェンラーイ県メーチャンおよびメーサーイ地区の数カ村において行なった現地調査の結果にもとづくものである。²⁾ しかし、これは集められた資料のすべてを発表するのではなく、全体のうちではっきりと確信をもって分析を下すことのできる部分のみを整理・提出したものと考えていただきたい。まだ整理のすんでいない資料があり、しかも現在においても新しい資料が増加しつつある以上、どうしても“tentative”たることをさげ得ないからである。

ここで扱うアカ語が何方言であるかということは、現段階では定義することができない。中国雲南省、西北部ラオス、ビルマの東北部シャン州、タイ国北端部という広い地域にわたって分布するアカ語に、多くの方言があることは疑問の余地がないけれども、実際にどこでどのような方言が話されているかということは、現在のところ、全然わかっていない。私は第1回目の調査において、距離的にごくわずかし離れていない村の間でもその言語は少しずつ異なっていることを知ったのであるが、第2回目の調査において、それらの相異は地理的なものと言うよりも、むしろ異なった種類のアカ族が一つの村を構成していることからくる相異である

- 1) この現地調査を行なうに当たり、いろいろな面で多大の協力・援助を与えて下さった、次の機関および個人に対し深く感謝の意を表す。National Research Council of Thailand; Division of Hill Tribe Welfare, Department of Public Welfare, Ministry of Interior; Chiang Rai Hill Tribe Welfare Settlement; Provincial Office of Chiang Rai; District Office of Mae Chan; District Office of Mae Sai; Faculty of Arts, Chulalongkorn University; People of Saen Chai, Alu (Ajo) and Phami Villages; Mr. Pio Sam; Mr. Paul Ca Htaw; 京都大学東南アジア研究センター; 同バンコク連絡事務所; 京都大学言語学研究室。
- 2) アカ語、アカ族、調査地、インフォーマントその他の一般的なことからについては、拙稿「アカ語の現地調査より」『東南アジア研究』第3巻第3号(京都, 1965); 西田龍雄「タイ国北部の言語調査について」『東南アジア研究』第3巻第3号(京都, 1965)を参照。

ことに気がついた。³⁾ 私の手元にある資料だけをもとにしても、少なくとも三つのタイプのアカ語が同一村内で平行して話されていることがわかる。こういった意味で、本稿に提するアカ語を地理的な意味での方言として定義することは不可能であるから、ここに示すとき音素体系を有する多くのアカ語のうちの一つと定義しておくことにする。

本稿は音素論（Ⅰ章）と形態論（Ⅱ章）とより成り立つ。音素体系はごく概略的にはあるが先に発表したことがあるので⁴⁾、ここでは新しく発見された事実にもとづいて補正を加え、より詳細なものとするであろう。音素論においては、形態音素論的考察を概略的に加えるが、これに関しては、私自身はたしてそうであるのかどうか決断を下しがたい点が多いために、ごくひかえ目に触れるにすぎない。本稿の中心は、したがって、形態論ということになるが、スペースを節約するため、例は最少限度にとどめる。形態論より1段上のレベルである統語論（syntax）は、ここでは取り上げずに、後に独立して発表するであろう。

ある特定の言語を記述する方法はいろいろあるだろうが、その言語の特色をできるだけ顕著に浮かび上がらせるような方法をとるのが最も妥当だと考えられる。ここで用いる手法は、もちろん構造言語学のそれにはちがいないのであるが、上記の事実を考慮して、言語の要素の結合の仕方ということを特に重要視するであろう。例えば、/p, b, m/ は /y/ と結合して音素結合を形成することができるという点で他の子音とは別の類として扱われるであろう。このことは最下位のレベルである音素論から最高位のレベルである統語論に至るまで当てはまるのであるが、アカ語については、特に形態論のレベルにおいて、このような要素と要素との結合方法を中心に記述を進めることが、言語の特色をよりはっきりとさせることになると思います。これは、アカ語のみならず、ラフ語等の他の同系統言語にも言えるであろう。⁵⁾

Ⅰ 音 素 論

概 略

音素論のレベルにおける最小単位は音素であり、音素が結合して音節を構成する。発話（utterances）は節により、節は句により、句は音節により構成される。これらの節、句、音節はそれぞれ特定の連結により区切られたものである。一つの発話は最低一つの節を含み、一つの節は最低一つの句を含み、一つの句は最低一つの語（word）を含み、一つの語は最低一つの形態素を含み、一つの形態素は最低一つの音節を含むが、これら形態素および語について

- 3) 北タイにおけるアカ語の異なったタイプについては、拙稿「再び北タイより一ラフ・ナ語の現地調査―」『東南アジア研究』第6巻第2号（京都、1968）；ビルマにおけるアカ語については、Paul Lewis, "Akha Phonology" *Anthropological Linguistics*, (1968) を参照。
- 4) 拙稿「アカ語アルー村方言の音素」『東南アジア研究』第4巻第1号（京都、1966）
- 5) ラフ語の音素体系については、拙稿「ラフ・ナ語の音素体系―ラフ・ナ語の記述―」『東南アジア研究』第6巻第3号（京都、1968）を参照。

は形態論で扱う。⁶⁾ 音素は子音, 母音, 声調類 (tonemes), 連結に分類され, それぞれ下位区分を有する。⁷⁾ 記述の順序から言って, すべての要素を同時に扱うことは不可能であるから, どうしても前後するのはやむを得ない。例えば, 子音の記述において未だ提出されていない母音について言及しなければならないのはさけ得ないところなのである。

1. 音節構成タイプ

開音節が圧倒的多数を占める単純な構造である。次の式で表わすことができる。

$$C_1(C_2)\left\{\begin{array}{l} V(C_3) \\ /m/ \end{array}\right\}T$$

Cは子音, Vは母音, Tは声調類をそれぞれ表わす。この式により許されたタイプで, 次のものが実際の言語に起こるタイプである。

- | | | | | |
|-----|---------------|------------|----------------------------------|--------|
| (1) | C_1VT | /ŋā/ | [ŋa : 55] | 《私》 |
| (2) | C_1C_2VT | /byǎ/ | [b ^h a : 21] | 《ミツバチ》 |
| (3) | C_1VC_3T | /mǔŋ/ | [mǔ : 21] | 《ウマ》 |
| (4) | $C_1C_2VC_3T$ | /ʼamyɔŋ/ | [ʼā 55 mǐč̣ : 33] | 《いつ?》 |
| (5) | $C_1/m/T$ | /ñm̄/ | [ɲm̄ : 55] | 《家》 |
| (6) | $C_1C_2/m/T$ | /lm̄bȳm̄/ | [lm̄ 11 b ^h ym̄ : 55] | 《墓》 |

2. 連 結

次の七つを設定する。これらは発話における休止とそれに先行あるいは後続する音節の長さともとづいて便宜的に設定したもので, まだ完全な記述だとは言えない。

- (1) /— / により表わす。これは /, / を初頭子音に有する付属形態素 (bound morpheme) あるいは付属語 (bound word) である音節にのみ先行し, これに後続する音節は弱まった形の音節であって, これによりつながれた二つの音節はあたかも一つの音節のようになる。
/byǎ'w̄/ [b^ha 11 'w̄ : 55] 《ハチミツ》 : /byǎ'w̄/ [b^ha w̄ 13] 《綿になっている》
- (2) /— — / で表わす。これに先行する音節は [2] の長さを有する。/ʼākū-šǎjī/ [ʼa 11 k'w̄ · 11 ʃa 11 dʒi : 55] 《犬の肉》
- (3) /— (スペース) — / で表わす。これに先行する音節は [3~4] の長さを有する。/ʼākū/ [ʼa 11 k'w̄ : 21] 《犬……》
- (4) /— (無記号) — / で表わす。これに先行する音節は [1] の長さを有する。/kūšē/ [k'w̄

6) 文 (sentence) というのはある特定のかぶせ音素により特徴づけられた節であると解せられる。

7) 強勢, リズム, イントネーションなどの連結以外のかぶせ音素については, ここでは, あえて触れないでおく。

11 [ɛ : 55] 《シラミ》

(5) /一・/ で表わす。これに先行する音節は [3~4] の長さを有するが、徐々に弱まり、わずかに下り気味となる。/ʔkũ./ [ʔa 11 k'wɪ : 21 ↓] 《犬だ》

(6) /一:/ で表わす。これに先行する音節は [2~3] の長さを有するが、弱まりや下り調のかわりに、持続的な (sustained) 調子をおびる。/ʔsũχälě ; mējəŋ 'i'w./ [ʔa 11 su 55 χa 11 lɛ : 21 ; mɛ 11 dʒā · 33 'i'wɪ 53] 《誰か、メーチャンへ行くのは？》

(7) /一:/ で表わす。これに先行する音節は [3~4] の長さを有するが、他の場合よりもやや長い休止を伴う。/ʔda, mējəŋ 'ilelā./ [ʔa 11 da 33, mɛ 11 dʒā 33 'i 55 le 33 la : 21 ↓] 《お父さん、(あなたは)メーチャンへ行くか？》。これに対し、/ʔda mējəŋ 'ilelā./ [ʔa 11 da 33 mɛ 11 dʒā · 33 'i 55 la : 21 ↓] は《お父さんはメーチャンへ行くか？》となる。

これら七つの連結のうちで、(1)、(4)は音節の間に、(2)は語の間に、(3)は句の間に、(5)~(7)は節の間に立つので、それぞれ音節連結、語連結、句連結、節連結と称する。言い換えれば、/一/ および /(無記号)/ により区切られた最大の単位は音節であり、/一/ により区切られた最大の単位は語、/(スペース)/ により区切られた最大の単位は句、/. /, /./, /:/ により区切られた最大の単位は節である。それぞれの場合の最大の単位はそれ以下の単位をも含むものである。

3. 声 調 類

次の五つの平板型が対立する、level tone register system である。

(1) 中平型 [33]…/(無記号)/ で表わす。/hə/ [hɜ : 33] 《これ》

(2) 低平型 [21]…/~/ で表わす。これは音声学的には [21] の低降調とも言えるが、全体の対立の仕方から見て、音素論的には低平型に当たると解する。/sǎ/ [sɜ : 21] 《齒》

(3) 高平型 [55]……/ / で表わす。/tsē/ [ts'e : 55] 《十》

(4) 中止型 [33 ↑']……/ / で表わす。(1) よりはわずかに高く短い。最後に声門緊張 (glottal constriction) を伴う。/lé/ [lɛ ·' 33 ↑] 《市場》

(5) 低止型 [11']……/ / で表わす。(4) と同じくらいの長さで、声門緊張を伴う。

/nè/ [nɛ ·' 11] 《精霊》

これらのうちで、(2)、(3)が最も長く、これを [5] の長さとする、(1)は [3] で、(4)、(5)は [2] として表わすことが出来るであろう。(1)~(3)の声調類は先に提出した音節タイプのすべてに起こり得るが、(4)、(5)は(1)、(2)のタイプの音節にのみ起こり、(3)~(6)のタイプに起こることはない。これらの声調類はたがいに連続して現われる時、それぞれ変化を受けが、これは以下のように、連結との関係において説明することができるであろう。中・低・高を M, L, H で、平板・昇・降・止を l, r, f, a で表わすこととする。

(1) / / で二つの音節がつながれた場合、1音節のごとき性格をおび、その声調は音声学的には次のようなピッチとなる。

- i) /Ml Ml/ → [Ml 33] /hɔ'w/ [hɔw̃33]
- ii) /Ll Ll/, /La Ll/ → [Ll 11] /dǎŋǎ'ǎ/ [dɔ : 11 ɲɛɔ 11] 《話せ！》
- iii) /Hl Hl/ → [Hl 55] /lā'ǎ.../ [laɔ 55] 《来て、……》
- iv) /Hl Ll/, /Ma Ll/ → [f 51] /lā'ǎ/ [laɔ 51] 《来い！》
- v) /Ml Ll/ → [Lf 31] /hɔ'ǎ/ [hɔ : 31] 《見よ！》
- vi) /Hl Ml/, /Ma Ml/ → [Hf 53] /mɔ'w/ [mɔw 53] 《見える》
- vii) /La Hl/, /Ll Hl/ → [r 15] /dzǎ'ǎ.../ [dzaɔ 15] 《食べて、……》
- viii) /La Ml/, /Ll Ml/ → [Lr 13] /dzǎ'w/ [dzaw 13] 《食べる》, /bà'w/ [bɔw 13] 《運ぶ》
- ix) /Ma Hl/, /Ml Hl/ → [Hr 35] /hɔ'ǎ.../ [hɔ : 35] 《見て、……》

(2) /(無記号)/ によって音節が連続した場合には、声調類のあるものはその対立をうしない、次のように [HH, MM, LL, HL, LH] となる。

- i) /Ml Ml/ } [Ml Ml] /'inɔŋ/ [i 33 nɔ̃ : 33] 《今日》, /'āmyá nɔŋ/ [a 55 m'ja 33
/Ma Ml/ } nɔ̃ : 33] 《何日？》, /myánú/ [m'ja 33 nu·' 33 ↑] 《目》。
/Ma Ma/ }
- ii) /Ll Ll/ } [Ll Ll] /sǎlǎ/ [sa 11 la : 21] 《先生》, /'ǎyɔ̀màne/ [a 11 jɔ 11 mɔ 11
/La La/ } nɛ· 33] 《彼らと》, /'ǎyɔ̀mà'ǎ/ [a 11 jɔ 11 mɔ 11 'a : 21] 《彼らは》,
/La Ll/ } /'ǎy'ɔŋ/ [a 11 jɔ 11 'ɔ̃ 55] 《彼らに対し》
/Ll La/ }
- iii) /Hl Hl/ } [Hl Hl] /tēsā/ [t'e 55 sa : 55] 《音》, /'idó=/ [i 55 dɔ· 55] 《出て
/Hl Ma/ } 行く》, /dólā=/ [dɔ 55 la : 55] 《出て来る》⁸⁾
/Ma Hl/ }
- iv) /Hl Ml/ } [HL] /mējəŋmǎ'ǎŋne 'olā tejē/ [mɛ 11 dzā 33 mə 11 'ɔ̃ 55 nɛ· 33 'ɔ̃ 11
/Hl Ll/ } la 55 t'e 33 dže : 55] 《メーチャンから帰ったということだ》
/Ml La/ }
/Ml Ll/ }
/Ma Ll/ }
/Hl La/ }

8) “=” は通常ほかの要素が後続することを示したものである。

- v) /Ll Ml/ }
 /Ll Hl/ }
 /Ml Hl/ } [LH] /'äyòmà dǒtǒ'ù hǒ dzǎdémajēlǎ./ [ʼa 11 jǒ 11 mǎ' 11 dǒ 11 tǒ 55
 /Ma Hl/ } 'u· 11 hǒ : 11 dza 11 dɛ 55 ma 33 dʒe 55 la : 21] ≪彼らは全員が食べ終わ
 /La Hl/ } ったか≫
 /La Ma/ }
 /Ml Ma/ }

上の説明における iv) v) では, [55] とかその他の数字で表わされた実際のピッチそのものが対立するのではなく高・低あるいは低・高という対立のみが存在するのである。/ˈ/ /ˌ/ であっても /ˌ/ であっても, これらはすべて「高:低」の対立になるのである。

(3) 語連結 /-/、句連結 /(スペース)/、節連結 /./ ; / の前ではすべての声調類が対立し、声調類(4)および(5)においては、声門緊張が現われるほかに、長さともピッチとにおいても他の三つの声調類とはことなる。/myánú-myáxó./ [mʲa 33 nuw' 33 mja 33 xo' 33] ≪まぶた≫, /'äyò myánú yomǔŋa./ [ʼa 11 jǒ' 11 mʲa 33 nuw' 33 jǒ 33 muw 11 ŋa : 33↓] ≪彼(女)は目がきれいだ≫, /'ǎkǔ-šǎjī kǔmǐ'ǎlǎ./ [ʼa 11 k'w· 11 ʃa 11 dʒi : 55 k'w 55 mʲa 53 la : 21↓] ≪犬の肉はたいへんおいしいか?≫, /dǔmma 'ima : 'ɛŋa, 'ɛxò ŋā mǎ'ímòŋǎ./ [dǔm 55 ma' 33 'i 55 ma' 33, 'ɛ 55 ŋa : 33 'ɛ 55 xo' 11 ŋa : 55 ma 11 'i 55 mǒ 11 ŋa : 33↓] ≪姉(妹)は行くといった、しかし、私は行きたくない≫

以上にあげた声調類における、あるいは声調類対立における、変化は各声調類のピッチその他の音声学的变化だと言える。これに対し、ある声調類そのものが別の声調類に取ってかわられるような変化を認めることができる。⁹⁾ この種の声調類の入れかわりに関しては、私はまだ明確な一般的規則を発見することができないので、以下に各々の例を提出するにとどめる。なお、表記法については、入れかわった結果をそのまま表記する。

(1) /ˈˈˈˈ/ においては2番目が高平型にかわる場合と、3番目が高平型にかわる場合がある。/tǐǎ./ [tʲi 11 ǎ : 21] ≪1人≫, /tǐǎ./ [tʲi 11 dʒə : 21] ≪1種類≫, /tǐǎ tǐǎ./ [tʲi 11 ǎ 55 tʲi 11 ǎ : 21] ≪めいめい≫, /tǐǎtǐǎ./ [tʲi 11 dʒə 11 tʲi 55 dʒə : 21] ≪1種ずつ≫。

(2) /ˈˈˈˈ/ においては2番目が中平型にかわる。/'ǎkǎ./ [ʼa 11 k'a : 21] ≪アカ≫, /dǒ./ [dǒ : 21] ≪言葉≫, /'ǎkadǒ./ [ʼa 11 k'a 33 dǒ : 21] ≪アカ語≫; /xǎpǎ./ [xa 11 p'a : 21] ≪カエル≫, /zǎ./ [za : 21] ≪子≫, /xǎpazǎ./ [xa 11 p'a 33 za : 21] ≪カエルの子, i.e. オタマジャクシ≫; /zǎ./ [za : 21] ≪子, 人≫, /mǐ= / [mi : 21] ≪女≫, /zǎmizǎ./ [za 11 mi 33 za :

9) Pike の “change from one toneme to another” に当たるであろう。Kenneth L. Pike, *Tone Language* (Ann Arbor, 1948) 参照。

21] 《妻》。以上の(1), (2)は一般的な規則として設定することができるだろう。

(3) ある限られた数の自立要素である音節は句連結, 節連結に先行する場合とその他の場合とで, 異なった声調を有する。/ŋā./ [ŋa : 55] 《私》; /ŋamā./ [ŋa 33 mǎ' 11] 《私達》; /ŋǎ'w/ [ŋaw 13] 《私の》; /nǎ/ [nɔ : 55...] 《あなた……》; /noñā./ [nɔ 33 nǎ' 11] 《あなた達》; /nǎ'w/ [nɔw 13] 《あなたの》; /sǎm./ [sɔm : 55] 《三》, /sǎmtsē./ [sɔm 11 ts'e : 55] 《三十》。

(4) 付属要素である音節の多くは, それぞれの場合に応じて, 声調が変化する。これらは形態論的にはいわゆる助辞 (particles) がほとんどであるが, どのような場合にどのような声調の入れかわりが起こるかという規則を発見することができないので, 以下に変化のおこる音節をあげるにとどめる。

- /=yo/ ~ /=yǎ/ 《(命令の助辞)》
 /=lo/ ~ /=lǎ/ 《(")》
 /=ʼo/ ~ /=ʼǎ/ 《(")》
 /=te/ ~ /=tǎ/ 《(終助辞)》
 /=le/ ~ /=lǎ/ ~ /=lē/ 《(")》
 /=mɛ/ ~ /=mǎ/ 《(")》
 /=ma/ ~ /=mǎ/ 《(")》
 /=ŋa/ ~ /=ŋǎ/ ~ /=ŋā/ 《(")》
 /=ʼw/ ~ /=ʼǎ/ 《(")》
 /=ʼa/ ~ /=ʼǎ/ 《(")》
 /=nɛ/ ~ /=nǎ/ 《(助辞)》
 /=na/ ~ /=nā/ 《(")》

以上にあげた声調類の入れかわり全体を通じて, 声調類 (1), (2), (3)の間では入れかわりが起こり得るが, これらと(4)または(5)とが入れかわる例は見られない。ただし, (4)と(5)とが入れかわることはある。/xēlǎ'w/ [xɛ 55 lǎw 13] 《命令する》, /lǎsē'w/ [lǎ 55 sɛw 13] 《こころす》。また, 接頭辞である音節 /'ǎ= ~ 'ā=/ も, 形態論的には同一の形態素と考えられるが, これらの異形態のうちのどれが現われるかということは, 音素論的に定まるものではなく, 後続する要素が具体的にどれであるかということにより決定される。/'āmā./ [ʼa 55 mǎ' 11] 《群, グループ》に対し, /'ǎlǎ./ [ʼa 11 lǎ' 11] 《手》においては, 後続する要素の声調が同じ / / であるけれども, /'ǎ=/ が現われるのである。/'ǎ=, 'ā=/ のいずれが現われるかは, それぞれの単語により定まっていると解さなければならない。この点に関しては, アカ語は単語形声調 (word pitch system) に似た性格を示していると言えるだろう。

4. 子 音

次の通り単独音素が23個、音素結合が3個対立する。閉鎖、鼻音、摩擦、破擦、側面の五つの様態 (manners), 五つの調音位置、有声：無声と、合計三つの範疇で対立をなすタイプである。閉鎖音は有声音では五つ、無声音では四つで対立、鼻音は有声：無声の対立はなく、四つの位置のみにより対立する。摩擦音は、有声：無声の対立のほかに、前者では三つ、後者では四つの位置で対立する。破擦音は有声：無声の対立のみである。側面音は /l/ のみであり、有声：無声の対立も、位置による対立もない。これらの子音について特に音声学的に詳しく記述する必要もないので、一般的な点のみをあげておく。

単独音素

様 態	調音位置	両 唇 歯 裏 硬 口 蓋 軟 口 蓋 声 門					
閉 鎖	無 声	p	t	c	k		
	有 声	b	d	j	g		
鼻	有 声	m	n	ɲ	ŋ		
摩 擦	無 声		s	š	x		h
	有 声		z	y	ɣ		
破 擦	無 声		ts				
	有 声		dz				
側 面	有 声		l				

音素結合

py, by, my

(1) 無声閉鎖音および無声破擦音は、声調類 (4), (5) を有する音節の初頭に立った時は常に無気音であり、それ以外の場合は常に 出気音である。/pā=/ [p'a : 55] 《とりかえる》, /āpà./ [a 55 p'a' 11] 《葉》; /tsē./ [ts'e : 55] 《十》, /tsé=/ [tsɛ' 33 ↑] 《渡る》。/tǎ=/ [t'a : 11] 《置く》, /tá=/ [ta' 33 ↑] 《塩からい》; /ǎcā./ [a 11 tš'a : 55] 《左》, /ācá./ [a 55 tš'a' 33 ↑] 《ひも》; /ka=/ [k'a : 33] 《植える》, /ká./ [ka' 33 ↑] 《十字弓》。

(2) /·/ は音節連結の前ではゼロとなる。/ñǝ'ĩ'w./ [nø 11 i'w 53] 《しおれる》。

(3) /c, j/ は破擦音であるが、音素分布全体から見て音素論的には閉鎖音の系列に入れる。/j/ は声調類 (4), (5) を有する音節においては口蓋化され [džj] である。/jɔ=/ [džɔ : 55] 《居る、有する》, /já=/ [dž'a' 33 ↑] 《所有する》。

(4) /ŋ/ が末尾子音として現われる時、すなわち /-Vŋ/ は [-ṽ] である。/mǝŋ./ [mɔ̃ : 21 ↓] 《馬》。

(5) /py, by, my/ はそれぞれ [pʲ, bʲ, mʲ] である。/mɛpyǝ./ [mɛ 33 p'jɔ : 21] 《顔だち》,

/byǎ./ [b^ha : 21] 《ミツバチ》, /yomyǎ./ [jɔ 33 m^ha : 21] 《多い》。

(6) /m/ が音節子音として現われた場合は [m̥] であり, /hm/ は [m̥^m] である。/sm̥./ [sm̥ : 55] 《三》, /càhm./ [tʃq̌ 11 m̥^m : 33] 《毛》。

以上の子音音素を音節構成における分布の仕方によって分類すると次のようになる。

C₁ → 単独の C₁- としてのみ現われるもの。/t, c, k, d, j, g, ' , n, ñ, s, š, x, h, z, ɣ, ts, dz, l/

C₂ → 単独の C₁- のほかに C₁C₂- における C₁- にも起こり得るもの。/p, b/

C₃ → 単独の C₁- および -C₂- として起こるもの。/y/

C₄ → 単独の C₁- および -C₃- として起こるもの。/ŋ/

C₅ → 単独の C₁-, C₁C₂- における C₁- および音節子音として起こるもの。/m/

5. 母 音

次の10個が対立する。前舌：中舌：奥舌の対立，高：中：低の対立，部分的に円口：平口の対立がある。全体としては，舌の位置，舌の高さ，口の形の三つの範囲で対立をなす。前舌母音では，高：中：低のほかに，中において円口：平口が対立する。後舌母音では，高：中：低

i		u	u
e	ø	ə	o
ɛ		a	ɔ

があり，高および中においては円口：平口が存在する。中舌母音は低の位置に /a/ があるのみである。詳細な音声学的記述は省き，次の一般的規則のみを示す。

(1) すべての母音は，声調類(4), (5)を有する音節に現われた際には，喉頭化母音 (laryngealized vowels) となる。/ciñs̥./ [tʃi 33 nɔ̌' 33] 《のみ(大工道具)》, /cé'w̥./ [tʃɛ̌w̥ 53] 《走る》, /cà'w̥./ [tʃq̌w̥ 13] 《煮る》, /'icù./ ['i 55 tʃu' 11] 《水》, /tsó'w̥./ [tsɔ̌w̥ 53] 《建てる》, /cɔ̌'w̥./ [tʃɔ̌w̥ 33 ↑] 《悪い》, /'w̥'cú./ ['w̥ 33 tʃu' 44] 《少し》, /cù'w̥./ [tʃu' : 13] 《割る》。¹⁰⁾

10) 声調類(4), (5)における喉頭化母音は Lewis における “laryngealized vowels” に相当するものである。ただし，Lewis は通常の母音とこの laryngealized vowels との2系列の母音を設定しているのに対し，私はこの laryngealization は声調類(4), (5)に伴う，単なる自動的な音声学的現象とみなし，母音に2系列を認めることはさける。また西田龍雄「リス語の研究——ターク県におけるリス族の言語の予備報告——」『東南アジア研究』第5巻第2号(京都，1967)における「緊喉母音」もこれと同じような性格のものと言える。この普通母音と喉頭化母音とを音素論的に対立するものとみなすか，あるいは本稿のアカ語におけるように，声調類に伴う自動的特徴とみなすかは，それぞれの自由であろう。この母音の問題については，別の所で詳しく論じたい。同じターク県のリス語に関しても，Roop は母音種の類における対立を認めてはいないようである。Delagnel, Roop, *The Problem of Linguistic Diversity in Thailand—an Approach to a Solution*—(Mimeograph), presented at the 1st Symposium on the Hill Tribes and Thailand (Chiang Mai, 1967) を参照。

(2) /e/ を有する音節に声調類(4), (5)が起こる例は私の資料には見られないが, Lewis は /bilè'u/ [bi₁₁ leu₁₃] ≪(上から下へ)与える≫という例を上げている。

(3) /-ŋ/ に起こる母音は /ɔ/ のみであり /-ɔŋ/ は [ĩ] である。/lǎŋ/ [lĩ : 21↓] ≪ウサギ≫

(4) /ø/ はわずかに二重母音の性格をおびる。/’úcø./ [’u₁₁ tš’ø̃ : 55] ≪角≫。特に /ɣ-/ においてその傾向が著しい。/ɣø./ [ɣø̃ : 21↓] ≪九≫

以上の母音を分布にもとづいて分類すると次のようになる。

V₁ → /C₁—, C₁C₂/ に起こるもの。/e, ɛ, ø, ʊ, ə, u, o, a/

V₂ → /C₁—/ に起こるが /C₁C₂—/ には起こらないもの。/i/

V₃ → /C₁—, C₁C₂—, C₁(C₂)—ŋ/ に起こるもの。/ɔ/

6. 音節構成における音素分布に対する限定

1. にあげた式により許された音節構成タイプのうちで, 次のものが実際の言語に現われるものである。先に示した子音, 母音その他の類により表わす。

(1) C_{1,2,3,4,5}. V_{1,2,3}. T_{1,2,3,4,5}. /sǎ/ [sɛ : 21] ≪齒≫

(2) C_{1,3,4}. C₅. T_{1,2,3}. /sm̄/ [sm̄ : 55] ≪三≫

(3) C_{1,2,3,4,5}. V₃. C₄. T_{1,2,3}. /lǎŋ/ [lĩ : 21] ≪ウサギ≫

(4) C_{2,5}. C₃. V_{1,3}. T_{1,2,3,4,5}. /byǎ/ [bja : 21] ≪ミツバチ≫

(5) C_{2,5}. C₃. C₅. T_{1,2,3}. /lm̄bȳm̄/ [lm̄₁₁ b̄j̄m̄ : 55] ≪墓≫

(6) C_{2,5}. C₃. V₃. C₄. T_{1,2,3}. /’āmyɔŋ/ [’a₅₅ m̄j̄ĩ : 33] ≪いつ?≫

上の法則はアカ語に実際に起こり得る音節タイプのすべてを表わすものである。具体的な音節全表は別の機会に発表する。

7. 例外的音素分布

以上の記述により明らかにされたアカ語の音素およびその分布からはずれるものとして, 借用語(主としてビルマ語, シャン語), 個有名詞, 擬声語などが存在する。これらは数的にも非常に限られたものであり, アカ語本来の音素体系の構成には参加しないものとみなし, 別に取り扱う。下のような形が認められる。

(1) /=aŋ/ : /mēsəŋ/ [mɛ₁₁ sã : 33] ≪メーサーイ≫(北タイ方言 /mēsəɹay/), /jīhəŋ/ [dʒi₁₁ hã : 33] ≪チェンラーイ≫(北タイ方言 /cěŋhǎay/), /mǎjəŋ/ [mɛ₁₁ dʒã : 33] ≪メーチャン≫(北タイ方言 /mēcǎn/)

(2) /=am/ : /mǎm̄/ [ma : m₁₁] ≪ビルマ≫(ビルマ語 /myámmá/, ラフ・ナ語 /maŋ/

- [mā : 33]), /lām./ [lām' 11] 《百万》(シャン語 /lāan/), /āyām/ [ʼa 55 jam • 11] 《季節》(シャン語?)
- (3) /=ai/ : /mēsai./ [mē 11 saē 33] 《メーサーイ》(北タイ方言 /mēsāay/), /sai./ [saē 11] 《店》(ビルマ語, /sáɪŋ/)
- (4) /=a/ : /ʼàa./ [ʼa 11] 《カラス》
- (5) /=aɔ/ : /lākàɔ./ [lā 55 kəɔ' 11] 《第9番目の月(月名)》(シャン語, /lǎənkáw/, 北タイ方言 /dǎənkáw/, 中部タイ方言 /dwankáaw/)
- (6) /=iŋ/ : /həbiŋ./ [hə 33 bī : 33] 《飛行機》(北タイ方言 /hǎabǐn/, 中部タイ方言 /ruabin/)
- (7) /=uŋ/ : /ñibuŋ./ [ni 11 bū : 33] 《日本》(北タイ方言 /ñipun/) /ñibu./ というアカ語化した形もある。

8. 形態音素論的考察

3. に述べたことと重複し、あるいはその範囲以上に出ないかもしれないが、ごく簡単に見ると次のような形態素交替 (morpheme alternants) のタイプを認めることができる。

(1) 音素的環境により自動的に決定されるタイプ。/ǎkǔ/ [ʼa 11 k'w : 21 ↓] 《犬だ》, /ǎkǔ/ [ʼa 11 k'w : 21] 《犬……》, /ǎkǔ-šǎjǐ/ [ʼa 11 k'w • 11 ʃa 11 dži : 55] 《犬の肉》, /ǎkǔnē/ [ʼa 11 k'w 11 nē : 33], 《犬と(で)》, /ǎkǔ'w/ [ʼa 11 k'w : 13] 《犬の》などにおける /=kǔ/ という音節の形は純粹に音素論的環境によって定まってくるものである。

(2) 同じく音素論的環境により決定されるが、ある声調類が別の声調類に置きかえられるタイプ。/xǎpǎ/ [xa 11 p'a : 21 ↓] 《カエル》における /=pǎ/ と /xǎpazǎ/ [xa 11 p'a 33 xa : 21 ↓] 《カエルの子》とにおける /=pa=/ とは同一の形態素の交替であり、{pǎ~pa}として表わすことができるが、これらのいずれが現われるかということは /~~/ → /~/ という音素論的法則により定まってくる。形態音素論的には両者とも {~/} で表記し、/~~./ → [11 21 : ↓], /~~./ → [33 33 21 : ↓] と解してさしつかえないのであるが、本稿では音素表記の段階で止めておき、それぞれを /~~./, /~ \./ と表記する。

(3) 形態論的に決定されるタイプ。たとえば、/ŋā/ [ŋa : 55] 《私…》, /ŋamà./ [ŋa 33 mǎ' 11] 《私達》, /ŋǎ'w/ [ŋaw 13] 《私の》における /ŋa/ は {/ŋā/∞/ŋa/∞/ŋǎ/} と考えられるが、これらの交替形のうちのどれが現われるかということは、/= 'w/ 《(所有を表わす助辞)》, /=mà/ 《グループ, 群》, /(スペース)/ 《(句連結)》のいずれが後続するかという形態論的条件によって定まってくるのである。形態素のうちで、ある限られたもののみがこのような形態論的に決定されるべき交替形を持つ。これについても、表記法は、それぞれの形そのままを音素論的に表記する。

(4) これも(3)と同様、形態論的に決定される交替と認められるが、こちらは接頭辞である音節に現われる。/a= /という音節は高平型または低平型のいずれかの声調類を有し、それ以外のものを有することはない。後続する形態素である音節とこの接頭辞との声調類の組み合わせを見ると次の通りである。

- i) /- ˊ / /'ābō./ [ʔa 55 bō : 55 ↓] 《木》
- ii) /- ˊ / /'āmyà./ [ʔa 55 mʲaː 55] 《いくら?》
- iii) /- / /'āmyoŋ./ [ʔa 55 mʲō : 33 ↓] 《いつ?》
- iv) /- ˊ / /'āsă./ [ʔa 55 sa : 21 ↓] 《終り》
- v) /- ˊ / /'āpà./ [ʔa 55 pɑː 11 ↓] 《葉》
- vi) /- ˊ / /'āñī./ [ʔa 11 ni : 55 ↓] 《年少者》
- vii) /- / /'āma./ [ʔa 11 ma : 33 ↓] 《母》
- viii) /- ˊ / /'ādžǝ./ [ʔa 11 dzo : 21 ↓] 《馬鹿者》
- ix) /- ˊ / /'āzà./ [ʔa 11 zaː 11 ↓] 《豚》

これらの i)~v) は /H:L/ 型, vi)~xi) は /L:H/ 型であり、これ以外の組み合わせは認められない。これらの例からわかるように、接頭辞の声調類は後続形態素である音節の声調類により音素論的に決定されるものではない。これらも、そのままの音素論的な形を表記する。

9. 言語類型学的考察

ビルマ語、リス語、ラフ諸語などの近親言語との対照において次のような点が考慮に入れられるべきであろう。

- (1) 閉鎖音、破擦音、摩擦音においてのみ有声：無声の対立があり、前2者においても、出気：無気の対立はない。
- (2) 子音結合は両唇の閉鎖音および鼻音と有声軟口蓋摩擦音との結合のみである。
- (3) 末尾子音は軟口蓋鼻音のみで、一定の母音を有する音節にのみ現われる。
- (4) 母音は、高：中：低の対立、および前：中：奥の対立に加えて、部分的に平口：円口の対立があり、やや不均衡な system をなす。
- (5) 声調類と音節タイプとの間に限定された分布関係が成り立つ。
- (6) ある種の声調類を有する音節の母音は喉頭化母音となる。
- (7) 開音節が圧倒的に多く、平板型声調による level tone register system である。
- (8) 音節連結によって音節が連続した場合は /H:L/ または /L:H/ の対立のみとなる。
- (9) 付属語（形態素）であり /- / を有する音節で /- / により他の音節に 前接的 (Proclitically) に接続するものがある。
- (10) 音節連結により連続する音節において、一定の環境においては、声調類の入れかわり

が起こる。

(11) 異なった音素論的構造（主として声調類）を有し，形態論的に決定される交替形を有する形態素があり，部分的に，word pitch system に似たところがある。

(12) 全体として，区分音素（segmental phonemes）の allophones はかなり単純であるのに対し，連結その他いろいろな環境における声調類の入れかわりは非常に複雑である。

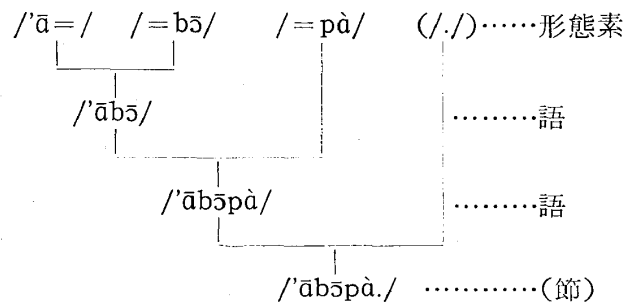
(13) 両唇鼻音のみが音節子音として現われる。

II 形 態 論

概 略

形態論における主な作業は発話（節，句，語）を形態素に分類すること，および，それら形態素の分類と結合の仕方とを記述することであろう。形態素の結合方法といっても，ほとんど無限といってもいいほどの数にのぼる形態素の一つ一つの結合方法を扱うことはできないから，形態素を有限数の類に分けて，それらの類と類との結合の仕方を問題にするであろう。そして，その結合の結果として得られたものをまた類に分け，その類と類との結合方法を記述するのである。この方法でもって形態論の最上レベルである語にいたるまで記述を進めることとする。形態素はそのままでは統語論のレベルに現われることはできず，語となってはじめて，統語論的構成（syntactic constructions）に立つことができるのである。（もちろん，形態素であると同時に語でもある要素も存在する。）形態素とは，簡単に言えば，最小の有意義の単位であり，語とは最低一つの形態素より成り，/-/ に先行する最大の単位である。

/’āb5./《木》，/’āpà./《葉》における /’ā=/ は語ではないが形態素であり，同じく /=b5, =pà/ もまた形態素である。/’āb5, ’āpà/ はいずれもそれ自身で統語論のレベルに現われるから，ともに語である。さらに，/’āb5pà./《木の葉》も統語論レベルに現われるから語である。このように /’ā=, =b5, =pà/ に相当する要素より /’āb5, āpà, āb5pà/ に相当する要素に至るまでの記述を形態論とする。これに対し，/’āb5-’āpà/ 《木の葉》というような形は，/’āb5/ も /āpà/ も統語論のレベルに現われるから，これは二つの語によって構成された統語論的構成とみなす。上例では，形態論は /’āb5, ’āpà/ のレベルでとどまり，これら二つの語の結合は統語論において取り上げられるべきものである。このように，形態素と統語論的構成との中間に語という単位を設定したほうがより便利であろう。以上は形態素の結合による語の構成法とでもいうべき



ことがらであるが，これと同時に，統語論的構成において占める位置にもとづいた語の分類も

成り立つ。しかし、これは統語論と形態論との中間にあり、部分的に統語論に属するので本稿では取り上げない。なお、かぶせ形態素 (suprasegmental morphemes) も存在するが、まだ整理が不完全であるから、現段階では取り上げないで置く。後に追加することは困難ではなからう。

1. 形態素分類

次のように番号によって形態素類を表わす。1台の数字で1は自立形態素あるいは自立語であることを、2は付属形態素あるいは付属語であることを表わす。100台の数字は形態素類を、10台のそれは形態素下位区分を表わす。形態素下位区分は、形態素結合すなわち語構成の記述にとって必要な限りにとどめる。例えば、/ŋā/ 《私》、/hə/ 《これ》はいずれも代名詞という下位区分のみで充分なのであって、これを人称代名詞とか指示代名詞とかのさらに下の区分に分けることは、形態論のレベルでは必要ないのである。¹¹⁾

なお、各形態素の訳語で具体的に決定しがたいものがある。例えば、/myánú/ 《目》、/myápyǎ/ 《顔だち》、/myábi/ 《涙》などにおける /myá=/ は《目》に関する意味を持つことは上例から理解されるのであるが、/*myá/ という独立した形で《目》の意味で現われることはないのである。このような場合 (非常に多いのであるが) には《()》によって表わす。これらの形態素の大部分は1音節から成るものであって、一見2音節あるいはそれ以

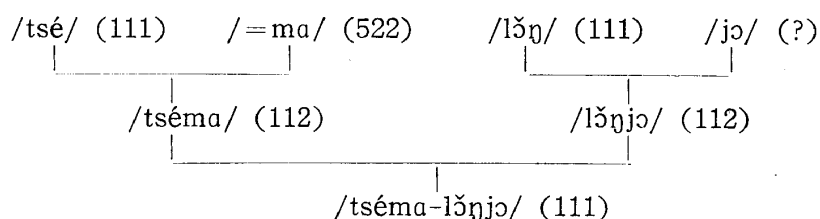
- 100 実詞 (Substantives) /ŋā/ 《私》
- 110 名詞 /nɔ/ 《あなた》
- 111 名詞 (自立) /ñm/ 《家》
- 112 名詞 (付属) /myá=/ 《(目)》
- 120 代名詞 /hə/ 《これ》
- 121 代名詞 (自立) /tə/ 《それ》
- 122 代名詞 (付属) /ŋǎ=/ 《私》¹²⁾
- 130 数詞 /xǒ/ 《九》
- 131 数詞 (自立) /sǎ=/ 《三》
- 132 数詞 (付属) /sǎ=/ 《三》のみ。
- 140 類別詞 (Classifiers) /mɔ/ 《(動物に用いる)》
- 141 類別詞 (自立) /xǎ/ 《(人に用いる)》
- 200 述詞 (Predicatives) /lā/ 《来る》

11) 統語論的構成において占め得る位置にもとづく語分類においては、さらに細かい下位区分が必要になるだろう。

12) 122は正確には121の交替形とみなされるべきものであろうが、今のところは、あたかも別個の形態素のごとく取り扱って置く。これは131と132についても同様である。

- 210 動詞 /ho/ 《見る》
- 211 動詞 (自立) /i/ 《行く》
- 212 動詞 (付属) /=tsā/ 《あつい》
- 220 形容詞 /yotsā/ 《あつい》¹³⁾
- 221 形容詞 /yogá/ 《寒い》
- 300 独立詞 (Isolatives) /ō/ 《おゝ!》
- 301 独立詞 (Isolatives) /m̃/ 《(肯定の意)》
- 400 助辞 (Particles) /lă/ 《(疑問)》
- 401 助辞 (自立) /šē/ 《(命令)》
- 500 接辞 (Affixes)
- 510 接頭辞 (Prefixes)
- 512 接頭辞 (付属) /ā=/, /ǎ=/, /yo/, /i=/, /ũ=/, /ǔ=/ のみ。
- 520 接尾辞 (Suffixes)
- 522 接尾辞 (付属) /=ma/, /=pō/, /=gɔ/, /=pǎ/, /=na/, /='w/ のみ。¹⁴⁾

上の多音節から成るように見受けられるものも、他の要素と比較することにより、数個の1音節の形態素に分析できるものがほとんどである。例えば、/tséma-lǝŋjo/ 《カワウソ》は次のように分析できるのである。



2. 0-段の語

形態素はすべて0-段に属する。¹⁵⁾ したがって、形態素であると同時に語でもあり、それだけ

- 13) 220 (221) は、形態素類と語類 (word classes) が一致しない唯一の例である。形態素の段階では 220 という類を立てることができないのであるが、512 のあるものと 212 とが結合した結果である要素は、語の段階においてそれ独自の分布を成すから、これに対して 220 という類を立てる。したがって、220 は形態素類ではなくて語類だと言えるが、記述の便宜上、ここに数え入れておく。
- 14) 500 はすべて付属形態素であるが、これに対して 140 と 400 とが自立形態素とされている。事実上、140 なり 400 なりがそれ自体で現われることはないのであるが、それにもかかわらずこれらを自立形態素とみなしたのは、これらを 500 と同じ意味での付属形態とみなすことはできないからである。500 は付属形態素、140 および 400 は自立形態素であるが付属語であると認める。
- 15) ここで数字によって形態素の分類結合の仕方を説明するのは、例えば Henry Osborn and William A. Smally, "Formulae for Comanche Stem and Word Formation," *IJAL*, Vol. XV, No. 2, (1949) などにおける方法とは別のものである。しかし本稿におけるだいたいの記述をさらに elaborate することにより、アカ語に関しても上記 "Formulae" に当たるものを展開することができると、私は考えている。これは別の機会に発表するであろう。

で統語論レベルに現われるものは0-段の語とする。これは他の形態素と一度も結合していないものである。

- (1) 111 : /sǎ/ 《歯》, /zi/ 《生命》, /lǒŋ/ 《ウサギ》, /'m̃/ 《空》, /nè/ 《精霊》, /sũxǎ/ 《紙》……。
- (2) 121 : /ŋā/ 《私》, /nɔ/ 《あなた》, /hə/ 《これ》, /tə/ 《それ》, /xõ/ 《あれ》。
- (3) 131 : /ti/ 《一》, /ñi/ 《二》, /s̄m̄/ 《三》, /'õ/ 《四》, /ŋǎ/ 《五》, /kò/ 《六》, /ši/ 《七》, /yɛ/ 《八》, /xõ/ 《九》, /tsē/ 《十》, /yā/ 《百》, /pā/ 《千》, /mū/ 《万》, /sɛ/ 《十万》, /lām/ 《百万》。
- (4) 141 : /xǎ/ 《(人)》, /mɔ/ 《(人以外の生物)》, /kɔŋ/ 《(長い形の物)》, /hm̄/ 《(丸い形の物)》, /bǎ/ 《パート(お金の単位)》, /byá/ 《ルピー(お金の単位)》, /to/ 《(長さの単位)》, /cá/ 《(長さの単位)》, /zu/ 《(対になったもの)》, /gu/ 《(対になったもの)》。
- (5) 211 : /lā/ 《来る》, /'i/ 《(下方へ)行く》, /lē/ 《(上方へ)行く》, /dzǎ/ 《食べる》, /yū/ 《取る》, /ŋě/ 《しゃべる》……。
- (6) 301 : /'m̄/ 《(肯定の意)》, /'õ/ 《(呼びかけ)》, /'ǎ/ 《(相づち)》, /dɔ/ 《(のしり)》……。
- (7) 401 : /le/ 《(終助辞)》, /lǎ/ 《問助辞》, /yɔ~yǒ/ 《(命令助辞)》, /nɛ/ 《(従属助辞)》, /mǎ/ 《(否定助辞)》……。

3. 1-段 の 語

形態素が他の形態素と1回のみ結合した結果構成されたものである。自立要素と付属要素、あるいは、付属要素と他の付属要素との結合の両者を含む。この結合の結果として得られた要素は自立あるいは付属のいずれかである。¹⁶⁾

- (8) 512+112⇒111 : この場合の512は /'ā=~/'ǎ=/, /'i=/, /'ũ=/ である。/'ā=/+/-nú/ 《(粒)》 ⇒ /'ānú/ 《粒, 粒状の物》, /'ǎ=/+/-cā/ 《(左)》 ⇒ /'ǎcā/ 《左》, /'i=/+/-cù/ 《(水)》 ⇒ /'icù/ 《水》, /'ũ=/+/-dũ/ 《(頭)》 ⇒ /'údũ/ 《頭》。/'i=/ は主として《(水)》を, /'ũ=/ は主として《(頭)》を表わすと思われるが, そうでない場合もある。/'ikɔŋ/ 《家》, /'ũgū/ 《アヒル》, /'ā=~/'ǎ=/ はほとんどあらゆる種類の事物に用いられる。/'ǎxò/ 《針, 針状の物》, /'ǎma/ 《母》

16) 結合の結果が付属である場合には, それを語と称するにはさしさわりのあるかもしれない。単に形態素結合(連続)(morpheme sequence)と呼んだほうがよいかもしれない。

- (9) 512+112⇒112 : /'ǎ= / + / = sū / ⇒ /'ǎsū = / <<(誰)>>, ……。
- (10) 512+211(5)⇒111 : /'ǔ= / + / yě / <<切る>>⇒/'ǔyě / <<かみそり>>, ……。
- (11) 512+211(5)⇒112 : /'ǔ= / + / m̄ŋ / <<長い>>⇒/'ǔm̄ŋ = / <<(遠い)>>, ……。
- (12) 512+212⇒111 : /'ǎ= / + / = c̄ / <<(甘い)>>⇒/'ǎc̄ / <<乳>>, /'ǔ= / + / c̄ / <<(突
び出ている)>>⇒/'ǔc̄ / <<アカ族成年女性の頭飾>>。
- (13) 512+212⇒112 : /'ǔ= / + / = šǎ / <<(あわれだ)>>⇒/'ǔšǎ = / <<(あわれなこと)>>, ……。
- (14) 512+212⇒221 : /yǔ= / + / = ñi / <<(小さい)>>⇒/yoñi / <<小さい>>, ……。
- (15) 111(1)+522⇒111 : 522は / = ma / であり, <<(女性)>>または<<(拡張)>>を表わす。
/ñm̄ / <<家>>+ / = ma / ⇒ /ñmma / <<家の女性用の区画>> /tai / <<タイ>>+ / = ma / ⇒
/taima / <<タイの女>>……。
- (16) 112+522⇒111 : 522は / = ma /, / = pǎ / <<(男性)>>, / = p̄ / <<(雄)>>である。
/gā = / <<(道)>>+ / = ma / ⇒ /gāma / <<道>>, /'ǔ= / <<(いとこ)>>+ / = pǎ / ⇒ /'ǔpǎ /
<<男のいとこ>>, /ya = / <<(ニワトリ)>>+ / = p̄ / ⇒ /yap̄ / <<雄ドリ>>, ……。
- (17) 112+522⇒112 : 522は / = ma /, / = na / <<(雌)>>, / = go / <<(雄)>>。/mi = / <<(ナ
イフ)>>+ / = ma / ⇒ / = mima / <<(刀)>>, /moŋ = / <<(ウシ)>>+ / - na / ⇒ / = moŋna /
<<(雌ウシ)>>, /moŋ = / <<(ウシ)>>+ / = go / ⇒ / = moŋgo / <<(雄ウシ)>>……。
- (18) 211(5)+522⇒111 : 522は / = ma / である。/yě / <<切る>>+ / = ma / ⇒ /yěma / <<の
こぎり>>……。
- (19) 212+522⇒112 : 522は / = ma / である。/l̄ = / <<(吹く?)>>+ / = ma / ⇒ / = l̄ma /
<<(大風)>>……。
- (20) 211(5)+522⇒211 : 522は / = 'w / である。¹⁷⁾ /lā / <<来る>>+ / = 'w / ⇒ /lā'w / <<来
る>>, ……。
- (21) 212+522⇒211 : 522は / = 'w / である。/nē = / <<(赤い)>>+ / = 'w / ⇒ /nē'w / <<赤
い>>……。
- (22) 212+522⇒212 : 522は / = 'w / である。/l̄ŋ = / <<(熱い)>>+ / = 'w / ⇒ / = l̄ŋ'w /
<<(湯をわかす)>>……。
- (23) 111(1)+111(1)⇒111 : /ñm̄ / <<家>>+ /'m̄ / <<空>>⇒/ñm̄'m̄ / <<天井>>, ……。
- (24) 111(1)+112⇒111 : /ká / <<十字弓>>+ / = myǎ / <<(矢)>>⇒/kámyǎ / <<矢>>, ……。
- (25) 111(1)+112⇒112 : /ká / <<十字弓>>+ / = d̄ŋ / <<(?)>>⇒/ = kád̄ŋ / <<(矢頭)>>。
- (26) 111(1)+211(5)⇒111 : /ñm̄ / <<家>>+ /d̄ŋ / <<築く>>⇒/ñmd̄ŋ / <<家族, 夫婦>>。

17) / = 'w / は他の522とやや異なっており、形態素と語との中間的位置に立つと考えられるが、これについては後に統語論において述べる。

……。

- (27) 111(1)+212⇒111 : /ñm/ 《家》 + / =ñõ/ 《(みどりだ)》 ⇒ /ñmñõ/ 《ふき屋根》
- (28) 112+112⇒111 : /ts̥s̥= / 《(人)》 + / =xã/ 《(?)》 ⇒ /ts̥sxã/ 《人, 人間》, …。
- (29) 112+112⇒112 : /cē= / 《(?)》 + / =my̥ɔ̃/ 《(?)》 ⇒ / =chēmy̥ɔ̃/ 《(?)》, …。
- (30) 112+211(5)⇒111 : /mĩ= / 《(火)》 + /bə/ 《射つ》 ⇒ /mĩbə/ 《銃》, …。
- (31) 112+211(5)⇒112 : /myá= / 《(目)》 + /myɔ̃/ 《まばたく》 ⇒ /myámyɔ̃= / 《(目ばたくこと)》
- (32) 112+212⇒111 : /'w̥= / 《(水, 液体)》 + / =l̥ɔ̃/ 《(熱い)》 ⇒ /'w̥l̥ɔ̃/ 《湯》 …。
- (33) 112+212⇒112 : /mĩ= / 《(土地)》 + /mũ/ 《(良い)》 ⇒ / =mĩmũ/ 《(こえた土地)》, …。
- (34) 122+112⇒111 : /ŋa= / 《私》 + / =mà/ 《群, グループ》 ⇒ /ŋamà/ 《私達》, …。
- (35) 132+112⇒111 : /tĩ= / 《一》 + / =jě/ 《(何 ?)》 ⇒ /tĩjě/ 《少し》, …。
- (36) 211(5)+112⇒111 : /t̥ð/ 《ねらう》 + / =là/ 《(手)》 ⇒ /t̥ðlà/ 《弓の引きがね》, …。
- (37) 212+112⇒111 : /ɣ̥ɔ̃= / 《かたい》 + / =ce/ 《(真中)》 ⇒ /ɣ̥ɔ̃ce/ 《中心》, …。
- (38) 211(5)+211(5)⇒112 : /yù/ 《眠る》 + /má/ 《ゆめ見る》 ⇒ /yùmá= / 《(ゆめ見ること)》, …。
- (39) 212+212⇒112 : /jä= / 《(?)》 + / =my/ 《(?)》 ⇒ /jämyɔ̃= / 《(言い争うこと)》

4. 2-段の語

2回の結合を経た語である。第1回目の結合は(1)～(39)のいずれかである。言い換えれば、(1)～(39)の結合の結果である要素と他の要素との結合によって構成された語である。例えば /yɔ̃hũ'w/ 《大きくなる》は /yɔ̃= / (512) + / =hũ/ (212) = /yɔ̃hũ/ (221) ; /yɔ̃hũ/ (221) + / = 'w/ (522) = /yɔ̃hũ'w/ (211) と表わすことができ、1回目の結合は(14)である。他のすべての結合もこれと同様である。即出の結合形式であることを下線により表わしておく。

- (40) 211(14)+522⇒211 : 522は / = 'w/ である。 /yɔ̃mũ/ 《良い》 + / 'w/ = /yɔ̃mũ'w/ 《良い, 良くなる》, …。
- (41) 111(8, 24)+522⇒111 : /'ăkă/ 《アカ》 + / =ma/ = /'ăkăma/ 《アカ族の女》,

- /bǒŋká/ 《箱, 入れ物》 +/=ma/=/bǒŋkáma/ 《バケツ》, /xǎlá/ 《トラ》 +
/=ma/=/xǎláma/ 《雌のトラ》, ……。
- (42) 111(17)+111=111 : /yama/ 《ゾウ》 +/šē/ 《虫》 =yamašē/ 《ムカデ〜サソリ
(?)》
- (43) 111(8, 12, 28)+112⇒111 : /'āji/ 《鳥》 +/=bǒŋ/ 《(筒, 空洞になった物)》 ⇒
/'ājibǒŋ/ 《鳥の巣》, /'ŭyē/ 《雨》 +/=sǐ/ 《(細かい粒)》 ⇒/'ŭyēsǐ/ 《ひょ
う》, /làtá/ 《(上)》 +/=pǒ/ 《(側, 方向)》 ⇒/làtápǒ/ 《上, 上方, 上面》,
……。
- (44) 111(8)+211⇒111 : /'icù/ 《水》 +/ga/ 《落ちる》 ⇒/'icùga/ 《滝》, ……。
- (45) 111(28)+212⇒111 : /sǎdà/ 《塩》 +/=cǒ/ 《甘い》 ⇒/sǎdàcǒ/ 《砂糖》, ……。
- (46) 112(8)+131⇒111 : /'āsū= / 《(誰)》 +/ǵǎ/⇒/'āsūǵǎ/ 《誰》, ……。
- (47) 112(25)+111⇒111 : /xǎdzū= / 《(夫)》 +/zǎ/ 《子, 人》 ⇒/xǎdzūzǎ/ 《夫》,
……。
- (48) 112(13)+212⇒111 : /'ācī= / 《(静か)》 +/=cū/ 《(?)》 ⇒/'ācīcū/ 《沈黙》,
……。
- (49) 112(9)+112⇒112 : /'ǎxo= / 《(クモ)》 +/=lo/ 《(?)》 ⇒/'ǎxolo= / 《(クモ)》
- (50) 112(9)+112⇒111 : /'ǎñɔ= / +/=lo/ ⇒/'ǎñɔlo/ 《真珠貝》, ……。

5. 3-段の語

合計3回の結合により構成される語である。これは(8)~(50)に至る結合の結果得られた要素同志の結合だと言える。

- (51) 112(49)+522⇒111 : /'ǎxolo/ 《(クモ)》 +/=ma/ ⇒/'ǎxoloma/ 《オニグモ》,
……。
- (52) 111(8, 10, 16, 28)+111(8, 16, 28)⇒111 : /yací/ 《ニワトリ》 +/yapǒ/ 《オンド
リ》 ⇒/yací-yapǒ/ 《オンドリ》, /'ŭyē/ 《雨》 +/pǐxǒŋ/ 《服》 ⇒/'ŭyē-pǐxǒŋ/
《雨ガッパ》, /'ǎkū/ 《脚, 足》 +/pǒtsū/ 《関節》 ⇒/'ǎkū-pǒtsū/ 《ひざ》,
/lǒŋma/ 《つぼ》 +/'ipǔ/ 《水入れのヒョウタン》 ⇒/lǒŋma-'ipǔ/ 《水つぼ》,
……。
- (53) 111(12, 26, 30, 32)+211(20, 21)⇒211 : /'āxò/ 《年齢》 +/xò'w/ ⇒/'āxò-xò'w/
《年をとる》, /ñmǎdǒŋ/ 《家族》 +/dǒŋ'w/ 《築く》 ⇒/ñmǎdǒŋ-dǒŋ'w/ 《家庭を
持つ, 結婚する》, /làtú/ 《こぶし》 +/làtú-tú'w/ 《こぶしを作る》, /'wǐlǒŋ/
《湯》 +/lǒŋ'w/ 《(熱する)》 ⇒/'wǐlǒŋ-lǒŋ'w/ 《湯を沸かす》, ……。
- (54) 111(12, 28, 32)+212(22)⇒211 : /xǎmē/ 《口》 +/=mǎ'w/ 《(?)》 ⇒/xǎmē-

mě'u/ 《歯をみがく》, /sěńó/ 《靴》 : /-nó'u/ 《(はく)》 ⇒ /sěńó-nó'u/ 《靴をはく》, /'ǔxǔ/ 《枕》 : /-xǔ'u/ 《(枕をする)》 ⇒ /'ǔxǔ-xǔ'u/ 《枕をする》, ……。

(55) 112(33, 38) + 211(20, 21) ⇒ 211 : /dónū= / 《(すわる)》 + /nū'u/ 《すわる》 ⇒ /dónū-nū'u/ 《すわる》, ……。

(56) 112(11, 13, 39) + 212(22) ⇒ 211 : /jāmyo= / 《(?)》 : /-myo'u/ 《(?)》 ⇒ /jāmyo-myo'u/ 《言いあらそう》, /'ššǎ/ 《(あわれ)》 : /-ššǎ'u/ 《かわいそうだ》 ⇒ /'ššǎ-ššǎ'u/ 《あわれむ》, /náyo= / 《(?)》 : /-yo'u/ 《(?)》 ⇒ /náyo-yo'u/ 《そめる》, /'ǔpè= / 《(吐く)》 : /-pě'u/ 《(吐く)》 ⇒ /'ǔpè-pě'u/ 《吐く》, ……。

(57) 221(14) + 211(21) ⇒ 211 : /yotsā/ 《暑い》 + /tsā'u/ 《暑い》 ⇒ /yotsā-tsā'u/ 《暑い》, /yogá/ 《寒い》 + /gá'u/ 《寒い》 ⇒ /yogá-gá'u/ 《寒い》, ……。

6. 3-段以上の語

アカ語においては、3-段以上の語というのはほとんど見られない。例えば /pōtsǔ-dmǔm'u/ 《ひざをおり曲げる》というような形があるが、これは非常にまれであり、これと平行して同じ意味の /pōdm-dm'u/ という形があるから、前者は例外的なものと言えるであろう。後者は (112 : 212 ⇒ 112) + (212 + 522 ⇒ 212) ⇒ 211 で表わすことができ、5. における(56)に相当する。前者は (112 + 112 = 111) + (212 : (212 + 522 ⇒ 212) ⇒ 212) ⇒ 211 とでも表わせようが、このような例はただ1例しかないので、5. には取り入れずに置く。

7. 形態論における特色

- (1) 形態素の圧倒的多数は1音節より成る付属要素である。/'ā=, 'ǎ= /, ……。
- (2) ほとんどの語は2音節、あるいは4音節より成る。/'ǎyò/ 《彼》, ……。
- (3) 4音節から成る語は2音節ずつの対に分かれるものが大半を占める。/'āpyǎ-pyǎ'u/ 《熱がある》, ……。
- (4) 2音節の語は、いずれか一つの音節、あるいは2音節ともが付属形態素であるものが大部分である。/mǎ'u/ 《見える》, ……。
- (5) 2音節ずつの対より成る4音節の語は、いずれか一方、あるいは両者ともが付属的である。/golǔ-gosǐ/ 《キセルの頭》, ……。
- (6) 4音節から成る語においては、4音節のうちの2音節が同一形態素である場合が非常に多い。/myánú-myáxó/ 《まぶた》, ……。

(7) 4音節音における2音節ずつの対は、通常 /-/ によりつながれる。/’āsă-să’u/ 《終わる》, ……。

あ と が き

以上でアカ語の音素体系および形態構造の概略を終えるが、まだ残された問題が多い。特に形態論においては、今後多くの補正を加えなければならないであろう。ここにあげた形態素類の設定および形態素類の結合については、いちおう整理できた資料をもとにして、だいたいのアウトラインを記したものであって、さらに elaborate しなければならないと同時に、ここでは全然触れていない大切な点をも組み入れていかなければならないだろう。歴史的（比較的）研究が、記述的研究の完全な終了を待たなくてもいいのと同様に、記述的研究もすべての資料が完全に正しく整理され終わるのを待つ必要はないのであって、いちおうわかった部分のみにもとづいてだいたいの構造を見通しておいたほうが、さらに多くの事実を考えに入れ訂正や追加を行なう場合にもより能率的であろう。未調査の言語を記述する際には、どうしても決定を下すことのできない点が多く出てくるものであり、さらに、決定を下したものについても、後になってその決定をくつがえしてしまうような例が不意に発見されることはザラにあるのである。したがって、本稿に述べたことがらのあるものが、あるいは本稿全体が、後になって取り消されるかもしれないということを常に覚悟しておかなければならないのである。

(1968年10月15日, Bangkok)